

8. アイスクリーム

各務原市立鵜沼第二小学校6年

岩田 みゆう 佐藤 佑依

↓

敦賀市立西浦小学校6年

山川 冴美

ある夏の暑い日、せみがミンミン鳴く中、ゆみはアイスクリームを買いに、近くのコンビニへ行った。

ゆみはアイスクリームをかうと、家へとまた歩き始めた。

少し歩くと、今までに見たこともないお店が一軒ぼつんと建っていた。とても古びた小さな店だったが、ゆみは気になって立ち寄ってみた。

中は暗くて古い木の臭いがぷーんとただよっていた。

たなには、ほこりをかぶったラジオやマッチ箱が置いてあった。

ゆみは、

「そうか、お店といっても、もう古いからやっていないんだ。こんなところ入らなきゃよかった」

と、思って帰ろうとした。

その時、おくの方から何かが赤く光っているのが見えた。

ゆみは不思議に思い、光のある所に行った。

そこには、大きな水そうがいくつもあり、中にはたくさんの金魚が気もちよさそうに泳いでいて、その横には、一人のおばあさんがおだやかな表情をしてすわっていた。

おばあさんが顔を上げ、ゆみに話しかけてきた。

「おやまあ、こんにちは。この金魚はみんなきれいな金魚ばかりだよ。一匹八十円なんだけど、買っていかないかい」

ゆみは急に話しかけられてびっくりした。

確かに金魚はどれも真っ赤で、泳ぐたびに、ひらひらとまるでカーテンのように尾びれがゆれ、とてもきれいだった。

一匹一匹ながめていると、背びれが変な形をした金魚を見つけた。

「どうしたんだろう、この金魚。他の金魚はきれいなのに……。かわいそうだから、私が飼ってあげられないかなあ」

そう思いながら、財布を取り出し、中のお金を確かめた。

幸い、財布の中には八十二円残っていた。

ゆみはすごく迷った。

一匹買えるが、その背びれのおかしい金魚を買ってあげた方がよいか、買わない方がよいか……。迷った末、一度家に帰ることにした。

ゆみは何も言わずに店を出て、ふくざつな気持ちで家までの道を走った。

家に帰るとゆみは、たたみの上で大の字になって考えた。

明るる日も、その明るる日も、考え抜いたあげく、ゆみはその金魚を買うことに決めた。

土曜日、ゆみは財布に八十円を入れて、あの古い小さな店に向かった。なんだか今のゆみの気持ちは、夏の太陽のように晴れ晴れとしていた。

店に入ると、ゆみは店のおくへずんずんと進んで行った。

そして、おばあさんに、

「この金魚ください」

と、思わず大きな声で言った。

おばあさんから背びれの変な金魚をもらうと、はずむような気持ちで家に帰った。

それからというもの、ゆみはその金魚を大切に、愛情をこめて育てた。金魚には『ルビー』という名前をつけ、毎日毎日、えさをあげたり、週に一回は水そうのそうじをしたり、時には水そうの中に、ルビーが喜びそうなビー玉やおはじきを入れてあげたりもした。

そして、自分がひまなときは、いつもそばに行ってながめたりした。

一ヶ月ほどたったある日の夜中、ゆみはみょうな胸さわぎがして目をさました。

時計を見ると、夜中の三時だった。

ゆみは、まだ寝ていられる時間だったので、もう一度ふとんに入って寝ようとしたが、なかなか寝つくことができない。

仕方なく部屋を出て、お茶を飲みに一階へ下りていった。

台所でお茶を飲み、また部屋にもどろうとしたとき、急にルビーのことが心配になった。ゆみは、ルビーのいるげんかんへ向かった。

ルビーの水そうのあたりで何かがにじ色に光っている。

ゆみは気になり水そう近づいた。

おどろくことに、にじ色にまばゆい光をはなっているのはルビー本人だった。

それから一分もたたないうちに、ゆみは夢の世界へ、にじ色の光と共に吸い込まれていった。☆

全身がにじ色の光で覆われたゆみ。

にじ色の光と一言で表現しても、今までに見たことのない色の数々の入り交じりに喜びをかくせなかった。

しかし、その光は早わざのように消えた。

「あれ、きれいだったのに」

「あんなに」

ゆみはわずかにくちびるを動かした。

次の日、ゆみはまた不思議な気持ちにおそわれ、例の古い小さな店のとびらをたたいていた。

「おばさん。ねえ」

「あら、いらっしゃい。今日は、どうしたんだい」

「あのね」

「どうなってるのかな」

「どうって、どうなのよ」

何から話していいやら見当がつかないまま、つつ立っているゆみがいた。勇気をふりしぼって聞いてみた。

「あのね。おばさん。あの金魚が、昨日、光ったの」

「おや、まあ。金魚が光るってかい。聞いたことも見たこともないわね。おかしな子だね」

おばさんに分かってもらえるはずもないことを納得するほかなかった。気がつくとも、市立図書館へかけだしていた。

（わからないことがあったら、思い立ったときにすぐ、調べなさい。困ったときには市立図書館があるでしょ）

担任のこの言葉を思い出したのだ。

図かんを開いても科学の古文書をひもといてもさっぱりだ。

わからない。

「よし、迷ったときは現場に帰れ。そう、あの金魚のもとへ。しっぽを出すのを待とう。光ってくれるのを待つしかないか」

たんていになりきっている。

ゆみはえさをあげたり、水そうのそうじをしたり、それに、ビー玉を増やしたりしてその瞬間をただひたすら待った。

「待たせるのもつらいけど、待つのもつらいわね」

あきらめかけたその時。ルビーが。ルビーが光った。

もう、ルビーと自分しかこの世に存在しないかのような驚きようだった。期待をして待っていたとはいうものの、ぶっ飛びそうな感を覚えた。言いたいことが次から次へと数珠つなぎになって出かかった。

しかし、

「……、え」

見る見るうちに姿形を自由に変えていくのに驚いて、出た言葉はただ一言。

どれくらいの時が過ぎたのか。

耳に入ってきたお母さんの声で、ゆみは我に返った。

「何なの。光ってないじゃない？」

「でも……でも……」

いつもは「でも」をお母さんに言うと、

「『でも』じゃありません。『でも』はあなたのためにある言葉じゃないのよ。『でも』ばかりね。いいから早くやりなさい。宿題、終わったの。もう、八時よ。早寝早起き、しっかり朝食よ。分かっているの。分かったら、早くやる。さあ、早く早く。いいから、早くって……！お母さんだって……、お母さんだって『早く』ばかり言うじゃない！お母さんの『早く』の方が私の『でも』より回数多いんだから、もう！」

となるところなのに……、いまは風のように会話が流れた。

「でも本当に、さっきまでは光ってたよ」

ゆみは、ほこらしげに付け加えた。

「さっき」にアクセントをおいた言い方になった。

「とにかく早く寝なさい、いいから。明日の朝食は……」

ゆみはふに落ちないままだったが、だまりこんで二階の部屋へ上がっていった。

よく朝、ゆみはいつもより早く起きた。

というより、ほとんど眠れなかった。

気になって眠れなかったのだった。

ゆみは、放課後、学校から帰ると親友のみきちゃんの家遊びに出かけた。もちろん、話題はルビーのことただ一つ。

「みきちゃん」

「話したいことがあるんだけど」

「だれにも言わないで。おかしいんじゃないの、って言われちゃうから。本当にだれにも言わないでね」

「わかったよ」

「私ね。金魚を買ったんだけど」

「ふうん。それがどうかしたの。いいじゃない」

「ここからが聞いて欲しいところなのよ」

間があった。

「自分から話しかけといて。早く言いなさいよ」

「あの、ね」

「私の買った金魚、ルビーって言うんだけど。出会いに運命を感じるのね」

みきは目を丸くした。

「で、その金魚、どこで買ったの」

会話に自然さが増した。

「とても古びた小さな店で。そう、この間、二人で行った三丁目のコンビニをまっすぐに五分ってところかな」

「やっぱり」

「え。何か知っているの」

ほんの一瞬、二人に間が生じた。

「知っているってことはないけど」

「私も、前にそこで……」

言葉を濁していることをゆみは悟っていなかった。

「でも、今のゆみの顔を見てると。幸せそうで」

「ルビーと出会ってから、変わったこととかがあって起きてるかな。相性とかはどうかな。そうだな。これから先にね。自分の進む道に迷いが生じたら、必ず表れるよ。だって、落ち込んでたときにルビーに出会ったでしょ。気持ちが沈んだときはきっと見てるよ。」

納得のいく答えが見つからないとき、ルビーにだけは話しかけてごらんよ。……ね」

「そうね。でも」

「ほら、また『でも』って言った」

「言っていないってば。もう」

「でも。どうしてルビーのことが分かるの」

すかさず聞いた。

「『でも』はゆみらしいね。ゆみはゆみだし、私は私。だね」

ルビーのことを知っているのは世界中でただ一人。みきだけ。

それは……。

「ゆみ、アイスクリームを買いに行こう」

せみがミンミン鳴いていた。

いつものように近くのコンビニを目指して足取りを軽くしていた。

いつしか、アイスクリームのヒット商品の話題に移っていた。